

『黙示録④一真の安らぎを得るために』

イザヤ書 66:22~24 ヨハネの黙示録 14:6~13

12~13章では、サタン化身である竜と二匹の獣が暗躍し、世界中の人々を惑わして自分たちの奴隷にしておもうと強力なタッグ(結束)を組んで好き放題に振る舞うと時が来ると預言されました。それに対し、この14章では、先ず、そのサタンに決して頭を下げない者たち(=あらかじめ神様の刻印を額に押されていた者たち)がちゃんと「十四万四千人」用意されていると預言されています。彼らは「小羊(=イエス様)」が天から降り、地上の「シオンの山」に立たれる《再臨》の時に、イエス様を迎える者たちなのです。世の人すべてがサタンに支配されることはありません。しかも、彼らは「初穂(=最初の実)」と呼ばれています。彼らの後にもまだまだ多くの信仰者が続くという意味なのです。

そして今日の箇所になります。ここからは、その題にもありますように三人の天使が登場してきます。なぜ、三人なのでしょう？ 実は12~13章で登場した竜と二匹の獣にまさに一対一で対抗するための三人なのです。故に、第一の天使は竜に、第二の天使は最初の獣に、第三の天使が二匹目の獣と相対しているのです。

最初の天使は「神を畏れ、その栄光をたたえなさい。神の裁きの時が来たからである。天と地、海と水の源を創造した方を礼拝しなさい」と「地上に住む(あらゆる)人々に告げ知らせ」ます。この言葉はサタンの野望を挫くための言葉に他なりません。と言うのは、あのイエス様が荒野で誘惑をお受けになった際に、サタンは「もし、ひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えよう」と言っていましたように、自分のことを拝ませることがサタンの暗躍する目的です。その為にそれこそ、あらゆる手段や誘惑をして来るのです。ただ、そのサタンの誘惑に負けないと頑張ることより、神様を畏れ礼拝することに徹して生きて行くことで乗り越えられるのだとされています。コロナ禍の今、大事な点です。

第二の天使は「倒れた。大バビロンが倒れた。怒りを招くみだらな行いのぶどう酒を、諸国の民に飲ませたこの都が。」

と預言しています。バビロンというのは、旧約聖書でエルサレムを陥落させ、イスラエル王国を滅亡させたバビロニア帝国の首都です。この時、既に滅んでいました。なのに、なぜ「大バビロンが滅びた(=滅びる時が必ず来るという預言)」と言われているのでしょうか？

ほとんどすべての解説者がこれは本当は、黙示録が書かれた当時のローマ帝国とその都ローマのことを指していると言っています。ヨハネはそのローマ帝国の命令で迫害され牢獄に囚われているですから、この書や手紙も検閲を受けていたに違いありません。その状況でローマ帝国の滅亡を直接、書く訳にはいかなかったのでしょう。更には、今後、どんな強い帝国が現れ、世界中を支配しようとも、必ず神様が滅ぼされる、容赦されないという預言でもあります。なぜなら、それら大帝国の傲慢な圧政の背後にはサタンの力が働いているからです。一匹目の獣を「全地が驚いて服従した」のは「竜が自分の権威をこの獣に与えた」からでした。そして結局は「人々は竜を拝んだ」のでした。人間の支配欲や権力欲は、あのバベルの塔のように神様をも凌駕しようとし、そのような人間や国家の企ては神様が必ず破られるのです。

第三の天使は「だれでも、獣とその像を拝み、額や手にこの獣の刻印を受ける者があれば、その者自身も、神の怒りのぶどう酒を飲むことになる」と預言されています。対決している二匹目の獣は、偽の預言者でした。奇抜な人の目を奪う行動を起こして、人々を惑わし「その右手か額に刻印を押させ」「この刻印のある者でなければ、物を買うことも売ることができないように」させたのでした。その獣の惑わしに陥ってしまった者たちへの裁きを預言しているのです。これは、神様が竜と二匹の獣を駆逐して下さる時に、その竜や獣に従ってしまった人たちが、自分たちは騙されたのだ、知らなかったのだから赦してほしいと主張しても、その各自の責任は問われることになるという預言です。その点では厳しい面があると言えます。故に「ここに神の掟を守り、イエスに対する信仰を守り続ける聖なる者たちの忍耐が必要である」と言われているのでしよう。そのために私たちには聖餐式のぶどう酒が用意されているのでは。聖別と忍耐のために！

# 週報

2020年度 教会標語

「生活の真ん中に礼拝する心を！」

2021年 1月24日

日本キリスト教団 上尾合同教会  
牧師 武田 真治

〒362-0041 上尾市富士見2-3-33

TEL&FAX 048-771-6549

<http://www.ageo-church.org/wordpress/>